

INDEX

— TOPICS —

1. 日本から世界へ 世界から日本へ ～リンパ系フィラリア症制圧にむけて～

熱帯医学研究所 フィラリア NTD 室ディレクター 一盛 和世

2. 海外拠点実地研修を終えて

財務部財務企画課総務班 井上 篤・CICORN事務室海外拠点係 岩永 麻美

— その他 —

人事：平成28年4月以降に国際連携研究戦略本部に新たに加わった教職員を紹介

TICAD6（第6回アフリカ開発会議）の関連イベントについて

1. 日本から世界へ 世界から日本へ～リンパ系フィラリア症制圧にむけて～

フィラリア NTD 室ディレクター

一盛 和世



現在、熱帯病の多くはその根絶、制圧に向けて対策が進められています。特にリンパ系フィラリア症（LF）は世界保健機関（WHO）の率いる世界制圧プログラムのもと、蔓延国政府、ドナー、NGO、製薬会社、大学・研究機関らによるグローバルレベルでの産官民学連携パートナーシップによって、人類の一大事業として、着実に制圧目標へと歩みを進めています。日本にもかつてLFが蔓延していた時代ありましたが、1970年代に根絶することに成功しました。このような経験を持つ日本には、地球人としてグローバルな視野を持てる人材を育成し、世界と協働して制圧プログラムに貢献していくことが求められています。



この目的を達成するための拠点としてフィラリア NTD 室は次の4点において活動しています。

活動内容

1. 情報データの収集および管理

- ・LF、顧みられない熱帯病（NTD）に関する情報およびデータを世界中から収集管理
- ・熱帯病対策に関する国内外会議等への参加貢献

2. 国内外ネットワークの構築

- ・ネットワークの構築、運営

- ・パートナーシップへの日本の参加促進

3. 日本国内向け情報発信、啓蒙活動

- ・熱帯病対策に関する講演、集会、メディア
- ・一般市民に向けた情報の発信、資料の展示

4. 熱帯病分野の人材育成

- ・大学生や専門家向けの講義、アドバイス
- ・関連資料、教材の作成

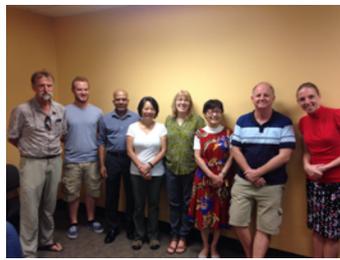
各項目に従い2015年度の活動について報告します。

1. 情報データの収集および管理

- ・共同研究「Completing the End Game: Achieving Lymphatic Filariasis (LF) in the Pacific Island Countries (with James Cook University)」プロジェクトの中で太平洋諸国におけるリンパ系フィラリア症制圧完了を伝播阻止により確認するため、関係各国の資料・データを収集。Catalogueを作成し、分析および解析に使用。活動記録をまとめたPacELF Way book No.2 出版に向けてプロジェクト進行中。



- ・FAO-APHC/OIE/USDA Regional Workshop on Prevention and Control of Neglected Zoonoses in AsiaへKey Speakerとして参加、7月15～16日 帯広
- ・WHO-15th Meeting of The Western Pacific Regional Programme Review Group on Neglected Tropical Diseases 出席、7月20日～22日フィリピン（ダバオ）



- ・WHO-Meeting of National Programme Managers, Preventive Chemotherapy Neglected Tropical Diseases 出席、9月28日～30日 and Regional Programme Review Group Meeting、10月1～2日ベナン（コトヌー）
- ・アフリカにおけるNTDs対策のための国際共同研究プログラム課題評価委員会 出席、10月2日、国立研究開発法人日本医療研究開発機構、東京
- ・研究集会「太平洋リンパ系フィラリア症対策会議」開催、10月17日、長崎大学、長崎
- ・WHO-Meeting of National Programme Managers' on Lymphatic Filariasis (LF) and Soil-Transmitted Helminthiasis (STH) 出席、11月10～11日、インド（ニューデリー）
- ・WHO-12th meeting of the Regional Programme Review Group (RPRG) meeting 出席、11月12～13日インド（ニューデリー）



- ・平成27年度第二回日本熱帯医学会理事会 出席、12月4日、大阪大学、大阪
- ・第2回日本熱帯医学会男女共同参画推進委員会企画シンポジウム オーガナイザーとして出席、12月6日、大阪大学、大阪
- ・沖縄感染症研究拠点形成促進事業「動物媒介性感染症対策の沖縄での施策提言とネットワーク形成に関する研究」沖縄での施策検討第一回会議 出席、12月9日、沖縄
- ・DNDi Clinical Expert Meeting on Lymphatic Filariasis 参加 発表 ”PacELF - Eliminating lymphatic filariasis in the Asia Pacific”、2016年1月22～23日インド（ニューデリー）



- ・第33回日本オセアニア学会研究大会シンポジウム 発表「太平洋リンパ系フィラリア症対策計画 (PacELF) とその成

功」、3月19日、マホロバ・マイズ三浦、神奈川県

・東京都蚊媒介感染症対策会議委員として活動

2. 国内外ネットワークの構築

- ・グローバルヘルス技術振興基金 (G-HIT) フォーラム参加、2015年6月5日、東京
- ・サモア大使館独立記念式典 参加、2015年6月12日、東京
- ・北里大学 意見交換、7月22日、北里大学、東京
- ・東京理科大学 意見交換、8月7日、東京理科大学、東京
- ・ゲイツ財団会議 -Coalition for Operational Research on Neglected Tropical Disease 出席、10月22～23日、米国（フィラデルフィア）
- ・Advocacy 活動「The Japan Time」12月8日 “Eliminating lymphatic filariasis in the Pacific”
- ・G7 Advocacy に関する意見交換のため Amber L. Cashwell (SABIN) 氏と面談、12月17日、東京
- ・山梨大学 意見交換、2月1日、山梨大学、山梨
- ・佐々 学 生誕100年記念式典・講演会 参加、3月14日、八芳園、東京
- ・国際協力機構 (JICA) / 青年海外協力隊 (JOCV) 感染症対策アドバイザー・グループ参加

3. 日本国内向け情報発信、啓蒙活動

- ・自衛隊中央病院 高等看護学院 第56期看護学生研修、4月23日、長崎大学
- ・「感染症とたたかう長崎大学展」、4月25日～5月28日、長崎歴史文化博物館、長崎



- ・お茶の水女子大学OG会 講演、5月9日、お茶の水女子大学
- ・キンチョウ Yahoo!Japan サイト「蚊が媒介する感染症予防のために まじ蚊！通信 まじめに楽しく蚊が媒介する感染症対策」内、対談記事「蚊の専門家に聞いてみた」5月18日～9月30日掲載
- ・イカリクリンネス大学特別記念講演会 講演「熱帯病とたたかった30年」、6月10日、ホテル日航東京、東京
- ・玉川学園スーパーグローバルハイスクール (SGH) グローバルキャリア講座 講演、6月13日、玉川学園、東京
- ・世界モスキートデー「蚊と蚊がもたらす病気を知ろう」開催、8月20日、長崎大学、長崎
- ・長崎大学熱帯医学研究所市民公開特別講座「蚊と蚊がもたらす病気を知ろう」講演「蚊がもたらす病気について／



日本から世界へ、8月29日、長崎大学、長崎

- ・読売新聞 10月18日【教えて yomiDr.】「顧みられない熱帯病」制圧へ連携 日本も貢献
- ・産経新聞 産経ニュース 10月20日【ノーベル賞受賞】「人類 VS 寄生虫の闘いに武器をくれた！」北里大・大村特別栄誉教授の業績を医師らが激賞
- ・第3回 BMSA 近畿地域拠点学術集会「熱帯病（昆虫媒介病）の国際情勢と対処法」講演「熱帯病（昆虫媒介病）の国際情勢」、12月11日、大阪医科大学、大阪
- ・桐朋女子高等学校 講演、1月20日、桐朋女子高等学校、東京



- ・山梨大学 第五回学長招待特別講演会 講演「WHO 顧みられない熱帯病対策：世界リンパ系フィラリア症制圧計画ー大村智博士のイベルメクチンを使った疾病対策の話」、2月1日、山梨大学、山梨
- ・平成27年度沖縄県委託事業「沖縄感染症研究拠点形成促進事業」動物媒介性感染症対策の沖縄での施策提言とネットワーク形成に関する研究 公開シンポジウム「顧みられない熱帯病 (NTD) 制圧」講演「フィラリア症の世界制圧と日本の貢献～WHOによるイベルメクチンを用いたフィラリア症抑制の取り組み～」、2月7日、パシフィックホテル沖縄、沖縄
- ・第34回日本国際保健医療学会西日本地方会ユースフォーラム「途上国のクスの未来～これからの途上国医療とクスの話をしよう～」講演「顧みられない熱帯病の薬剤投与による対策」、2月27日、川崎医科大学、岡山
- ・第9回長崎大学大学院医歯薬総合研究科リーディング大学院「熱帯病・新興感染制御グローバルリーダー育成プログラム」市民公開シンポジウム「リーダーシップを考える 2016：困難なプロジェクトを成功に導くリーダーシップ」講演、2月29日、長崎大学、長崎
- ・「APEX CLUB」第39号 “ケニアのツェツェバエキャンプ
- ・「クリンネス」2016年2月号 “熱帯病と闘う日々”
- ・「佐々学生誕100年記念誌 佐々学先生と私」 “HUMAN FILARIASIS” の佐々先生”
- ・ランチタイムセミナー開催、毎月第3金曜日、長崎大学、長崎



4. 熱帯病分野の人材育成

- ・熱帯医学研修過程「WHO 顧みられない疾病対策への取り組み」、6月1日、長崎大学
- ・熱帯医学専攻 MTM「NTD Filariasis Eradication program」、6月1日、長崎大学
- ・リーディング大学院 For nurturing global leaders in tropical and emerging communicable diseases, 6月2日、長崎大学
- ・愛知医科大学、6月8日
- ・リーディング大学院 For nurturing global leaders in tropical and emerging communicable diseases, 12月14日～15日、長崎大学
- ・東京大学「MDA/Preventive Chemotherapy - a strategy for Neglected Tropical Diseases (MDA)」, 1月27日、東京大学
- ・WHO インターンシップ / ボランティア派遣 支援相談窓口



2016年度も国内外での活動をさらに広く展開していきます。長崎大学においてもランチタイムセミナー（毎月）および世界モスキートデイイベント（8月）を引き続き開催します。また新たに、「一盛和世フィラリア塾」（全6回）では、グローバルな視野を持つ人材の育成を目的として30年間熱帯病との闘いを世界で繰り広げてきた経験と哲学を語り始めました。

これらの活動にあたり、長崎大学国際連携研究戦略本部、長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科、長崎大学熱帯医学研究所、長崎大学地域教育連携支援センター、より多くのご支援、ご協力をいただいておりますことを心より感謝申し上げます。



長崎大学 フィラリア NTD 室

<http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/lf-ntd/>

2. 海外拠点実地研修を終えて

財務部財務企画課総務班 井上 篤・CICORN事務室海外拠点係 岩永 麻美

平成 28 年 3 月 4 日から 8 日までの期間、熱帯医学研究所ベトナム拠点において、スタッフディベロップメント(SD)海外拠点実地研修を実施した。以下、簡単な日程と参加者の所感等を報告する。



3月4日(金)日本出国、ベトナム入国。ベトナム拠点到着後、拠点勤務の齋藤主査と3月6日に行われるハノイ市民公開講座準備に関する打ち合わせを行った。

3月5日(土)待機日

3月6日(日)ハノイ市民公開講座。開催場所のデーウホテル到着後、部屋を確認すると契約書に記載されていた部屋とは別の部屋が用意されていたというトラブルがあったが、ホテルマンと協力して来客誘導を行うことで対応した。公開講座では森田公一熱帯医学研究所長と東北大学の中島一敏先生が講演を行い、約40人が参加した。

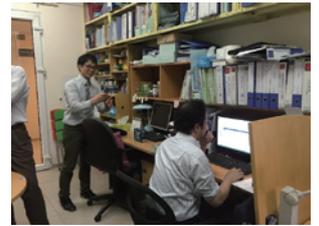
3月7日(月)ベトナム国立衛生疫学研究所(NIHE)の研究室を見学後、齋藤主査の銀行業務のためハノイの東京三菱UFJ銀行へ同行。その後、5月16日開催予定のシンポジウム打ち合わせ、費用化書類に関する事務打ち合わせを行った。井上氏ベトナム出国、日本入国。

3月8日(火)齋藤主査と確認しながら費用化処理をすすめた。

3月9日(水)同様に費用化処理をすすめた。

3月10日(木)本来は帰国予定日であったが、あと1日あれば2月の証拠書類を全て長崎に持って帰れると感じたため急ぎでフライト予定を1日ずらし、費用化処理を実施し、無事に2月分の証拠書類を持ち帰ることが可能となった。

3月11日(金)ベトナム出国、日本入国。



<岩永所感>

急遽決まった出張で、日本での仕事が滞ってしまうのではないかと不安を感じていましたが、実際ベトナムで仕事をしていて、パソコンさえあればベトナムでも日本とほぼ同様の仕事はできるということがわかり、なにより現地で齋藤主査がどのように仕事をおこなっているか、現地の慣習やベトナム人研究アシスタントの現状などが確認できてとても有意義な出張でした。費用化処理も日本から齋藤主査へ催促してPDFを送ってもらってそれを確認して、修正依頼を出してまた返って来るのを待って・・・という流れよりも現地で原本を確認して、聞きたいことがあればその場で齋藤主査に確認し、現地アシスタントへの修正依頼も私自身をお願いできるのでとても捗りました。もしまたこのような機会に恵まれればベトナム文化や現地での仕事の理解を深めるため積極的に参加したいと思いました。

<井上所感>

まずはベトナムで見た風景について。ベトナムの交通事情は、一車線の道路にも関わらず車とバイクが2列3列になって走行しており、歩行者の数十センチ横を車が平然と通過していた。大通りでは常に誰かがクラクションを鳴らしており、日本人の感覚で言えばまさに無秩序そのものであった。空気は大気汚染が深刻で、日本と比べてひどくかすんでいた。建物は日本ではまず見ないマッチ箱を積み重ねて作ったような形状の家々が並んでおり、私が見た建設中と思われる高層ビルは、地面から四本の柱を立ててその上にビルを乗せているような作りで、素人の私から見ると大丈夫なのかと心配になるようなものだった。帰国後、私のベトナムでの思い出話を聞いて、そんな危ないところには行けないと言う人もいたが、その風景の感じ方は人次第であり、海外経験がほとんどない私にとってはテレビで見えないような光景の連続で、刺激的なことばかりだった。

次にベトナム料理について。現地では、フォー、ブン・チャー(米麺と甘酸っぱい付けダレに揚げ春巻きや野菜を入れて食べる料理)、ザウ・ムオン・サオ・トイ(空芯菜の



ニンニク炒め)、料理の名称は分らないが、トマトベースのスープに揚げ豆腐や牛すね肉、野菜、香草などを入れて食べる鍋など様々なベトナム料理を食べた。ベトナム料理は主に中華料理の影響を受けているようであるが、中華料理のように辛すぎたり、味付けが濃かったりすることもなく、どれも日本人の口にも合うもので美味しかった。海外に行く野菜をなかなか摂れないことが多いとのことだったので、野菜が豊富にとれるベトナムはその点で苦労しないと思った。また、パクチーなどの香草が苦手な人でも、スーパーに行けば日本の食材も多く揃っており、日本料理のお店もあるので苦手を避けて生活することも可能だと思う。



次にベトナムの物価について。お金の単位は研修時のレートで1円が200ベトナムドン弱だった。日本円に換算するには、値札の数字からゼロを2つ取って半分にするという単純な計算が必要だが、基本的にベトナムは物価が安いので、最後の方はその計算も面倒になった。そのくらい物価は安い。お昼にベトナム拠点の先生方に連れて行ってもらった現地の人々が利用する飲食店では大盛のブン・チャーと春巻きを食べて250円ほど。ビールはお店で飲むと100円ちょっと、スーパーで缶ビールと買うと60円ほどだった(ちなみにベトナムのビールはやや味が薄く、よく言えば飲みやすい)。しかし、油断していると外国人向けのレストランや格式高そうなベトナム料理店で3,500~4,000円ほど請求され、青くなることもある。現地人向け

と外国人向けの価格設定があると思われる。



海外拠点の業務で印象的だったのは、日本と違って予定通りに仕事が進まないことが多いということだ。研修中の短い間だけでも、市民公開講座の会場として押さえていた部屋と違う部屋をホテルが準備していたり、先生用に手配していたタクシーが時間通りに来なかったりというトラブルがあった。日本では、働く上で段取りの大切さを痛感することが多々あるが、ベトナムでは、起こるかもしれないトラブルを予め踏まえた上での段取り、そして予測できなかったトラブルが発生した際に臨機応変に対応できる力が必要だと感じた。

また、そのような対応が問われる現場の業務をする一方で、ベトナム拠点と日本の海外拠点係をつなぐパイプ役もこなさなければならない。ベトナムで総務系や会計系(特に出納業務は大変そうだと感じた)の業務を行いながら、日本での業務の進捗を把握して連携をとる、これを事務職員一人で行うという話を聞き、素直にあと一人事務職員がいればいいのにと感じてしまった。



研修期間は移動日を含めて5日間だったものの、普通の所属部署での業務から離れ、このような海外拠点での研修に参加し、様々な方と出会い、仕事に対する考え方や体験談などを聞いたのはとても良い機会になった。ベトナム拠点では、先生と事務職員、そして現地のアシスタントの方々との距離が近く、皆さんが同じ方向を向いて仕事をしている印象を受けた。これは長崎大学という一つの組織で共に働く上で、どの部署でも大切なことだと思う。お手伝いを

させていただいた市民公開講座の中で、感染症分野の第一線で活躍される先生方の話を聞きながら、ご自身の研究分野についての意識の高さに驚くとともに、私も心が奮い立たされる思いだった。新聞報道等で、世界で感染症の流行が発生すると、特別対策チーム等の一員として奔走、ご尽力されている本学の先生方の記事を目にするが、そのような先生方と同じ組織で働くことをとても誇りに感じる。その先生方の研究に対する思いを理解していれば、事務職員の立場でも仕事への取り組み方が変わらと思う。現在の部署では先生方と関わる仕事はあまりないが、今後先生方と

関わる部署に異動した場合はそのスタンスを大切にしなければならないと感じた。

最後にSD研修実施にあたり、研修を受け入れていただいた熱帯医学研究所長、ベトナム拠点の山城拠点長、長谷部教授ほか教職員みなさまのご協力に感謝します。また、総務担当理事及び人事課より「SD研修支援事業」として予算配分いただき実施できたことに改めて御礼を申し上げます。今後の事務職員の国際人材育成の一助になることを祈念します。

人事：平成28年4月以降に国際連携研究戦略本部に新たに加わった教職員を紹介

H28.6.1

北 潔 副本部長/研究科長
(熱帯医学・グローバルヘルス (TMGH) 研究科)
金子 聡 兼務教員/教授
(熱帯医学研究所、TMGH研究科)

稲岡 健ダニエル 助教
尾崎 里恵 特任研究員
阪倉 信子 技術補佐員
山田 利恵 事務補佐員

TICAD6 (第6回アフリカ開発会議) の関連イベントについて

当欄では、CICORNが関わっているTICAD関連イベントについて報告・説明します。詳細についてはお問い合わせください。

■平成28年3月21日：水産・環境科学総合研究科
JSPS CORE-TO-CORE PROGRAM - ASIA-AFRICA SCIENCE
PLATFORMS JOINT SEMINAR (ケニア (キスム))
ケニア国立海洋水産研究所 (KMFRI) との JSPS 研究拠点

形成事業で得られた成果の共有と情報発信等についてセミナーを開催しました。

■平成28年5月17～19日：工学研究科

SCIENCE, Technology and Innovation week、(ケニア (ナイロビ))

ロボコン開催における審査委員、ロボティクスに関するセミナーの開催等

TICAD とは

TICAD とは、Tokyo International Conference on African Development (アフリカ開発会議) の略であり、アフリカの開発をテーマとする国際会議です。1993年以降、日本政府が主導し、国連、国連開発計画 (UNDP)、アフリカ連合委員会 (AUC) 及び世界銀行と共同で開催しています。2013年6月には、横浜において5回目となるTICAD V (第五回アフリカ開発会議) を開催しました。

次回TICADは初のアフリカ開催であり、2016年8月27日、28日にケニアで開催されます。

TICAD VI の目指す方向性

1 TICAD V との関係

・TICAD VI はTICAD V (2013年) から3年後の開催となりますが、TICAD V で採択された横浜宣言及び横浜行動計画は2017年までの3年間の方針を定めており、TICAD VI の時点でも引き続き有効です。

・日本がTICAD V時に表明したアフリカ支援パッケージ (2013年から5年間でODA約1.4兆円を含む官民による最

大約3.2兆円の取組) は、引き続き実施しています。

2 新たな課題・進展への対応

・TICAD V以降にアフリカで発生した諸問題 (エボラ出血熱の流行と保健システムの脆弱性、暴力的過激主義の拡大、国際資源価格の下落等) への対応の必要性が顕在化しています。

・開発と貧困削減に向けたアフリカ自身の取組 (アジェンダ2063) の推進を支援する必要があります。

・国際的な取組 (気候変動 (COP21)、持続可能な開発目標 (SDGs)) を進めることが期待されています。

3 想定される優先課題

・TICAD V以降の新たな動きを踏まえ、アフリカの経済多角化・産業化、強靱な保健システム、社会の安定化を始めとする各分野において、TICADの特徴及び日本の強みを活かした具体的貢献を示せるよう共催者及びアフリカ各国の官民を挙げて議論を重ねています。

外務省ホームページより引用

※当ニュースレターに掲載したい国際研究 (事前調査等も含みます) や取組事例などがあれば編集までご連絡願います。

発行人：国際連携研究戦略本部
編集：平岡 久和 国際連携研究戦略コーディネーター / 准教授

〒852-8523 長崎市坂本町1丁目12-4

TEL: 095-819-7008 Fax: 095-819-7892

e-mail: cicorn@tm.nagasaki-u.ac.jp